

国語表現・スピーチの実践報告

——新聞記事を読んで——

美濃 千鶴

一、はじめに

(1) 学校、生徒および教科の特色

私が講師を務める聖母女学院中学高等学校（大阪・寝屋川市）は中高一貫の女子校である。高校の場合、五クラス中一年生は一クラスを、二、三年生は二クラスを進学コースとし、残り四ないし三クラスを一般コースとしている。国語表現は高Ⅰで週一時間全クラス必修、高Ⅲでは週二時間一般コースのみ必修とされている（一九九八年現在）。九十八年度は高Ⅰ一般コースの国語表現を担当した。

この学年の生徒は全体的に誤字脱字も少なく、文章構成などもしっかりしている。反面、作文等を書かせた場合、「期待されている文章」を察知して、それに合わせて書こうとする要領のよさもしくは見受けられた。学年の雰囲気は全般的に明るく活発、自己主張が強い生徒が多いのが特徴である。その分授業中の反応

も顕著で、授業課題については比較的積極的に取り組む。高Ⅰ一般コースの平均人数は一クラスあたり四十一人である。

(2) 九十八年度高Ⅰ国語表現の目標

前述の通り、本校では高Ⅰと高Ⅲで国語表現の授業が設定されている。高Ⅲの国語表現は推薦入試のための小論文対策が中心になるため、どうしてもテーマを与えて文章を書かせ、それを添削するといった授業になる。しかし、今年度の高Ⅰの授業についてはあえて

○書くことに慣れさせること

○生徒が楽しんで取り組めること

を中心にした授業計画を立てた。理由は

①高Ⅰ対象の授業で、せつば詰まった受験対策は当面必要でない。

②文章を読解する能力や感性に乏しい生徒が多い。自力で文章を読み取り、かつそれを自分の書く文章に活かすというプロ

セスを、生徒たちが取り組みやすいレベルで授業に取り入れるたい。

③ 社会的関心の薄い生徒たちに、世の中にはさまざまな考え方や価値観があることと、その中で自分の意見を持ち続けることの大切さを学んでほしい。

以上の三点である。②③については、自分自身のことや、身近な話題（家族、友人、学校など）についてはいい文章が書けるのに、読書感想文や社会的なできごとなど、客観的なテーマを与えられるととたんに書くことを敬遠してしまう生徒が多いということが念頭にあった。その点を考えると、いきなり「書き方」の指導をするのではなく、高1の段階では文章を書く上での「心の下地」をつくる授業をした方がよいのではないか、というのが年度始めの私の結論であった。また、まず自分を見つめることから始め、そこから少しずつ関心を外へと広げていく展開にした方が、生徒たちは授業になじみやすいのではないかと考えた。

そうした観点で、一学期は「自分を見つめる」、二学期は「社会の中で」、三学期は「ことばについて」をメインテーマとして設定し、ディスカッションをしたり、作文やレポートの作成を行った（別表参照）。そのなかから二学期に実践したスピーチについて報告する。

○一学期 自分を見つめる

・オリエンテーション
（シルヴァスタイン『ぼくを探しに』）

・自分について

自己分析ノートを作る

自己分析ノートをもとに作文を書く

・原稿用紙の使い方

・ディスカッション

菊池寛「三浦右衛門の最後」を読む

グループに分かれて問題点をディスカッション

ディスカッションしたことを参考に「三浦右衛門…」

の感想文を書く

○二学期 社会の中で

・現代詩鑑賞

（高田敏子「朝」など社会風俗を風刺した作品六編）

・意見文の書き方

・意見文「携帯電話」

・スピーチ 新聞記事を読んで

原稿を書く

発表

○三学期 ことばについて

・しりとりを詩を書く

・方言について

・敬語について

・レポート作成「ことばについて」

二、「新聞記事を読んで」——スピーチの実践

(1) 事前準備

二学期当初から、十月から十一月にかけて全員にスピーチをしてもらう旨を予告、家で新聞を読んでいて興味深い記事があればあらかじめ切り抜いてとっておくよう指示した。これは、授業に対して意欲の高い生徒ほど記事に対するこだわりがあり（高齢者介護について知りたい、動物虐待について話したい、など）、スピーチの準備をする時期に自分にとって適当な記事が出ているとは限らないからである。また、文章を書くのに時間がかかる生徒にとっては、テーマを早く決定することで原稿を書く時間が多めに確保できるという利点もある。各クラス十人程度、授業時間に入る前に自分で記事を選び、切り抜いて持ってきた生徒がいた。その反面、原稿を書き出す段階に入るまで、スピーチをするということをわかっていない生徒もあり、指示を徹底させることの難しさを感じた。

(2) 新聞記事を選び、スピーチ用の原稿を作成する（二時間）
家庭でとっている新聞を各自が持参し（授業前日か当日の新聞、朝刊夕刊は問わない）、自分が興味を持てる記事をひとつ選ぶ。記事の内容は問わない（文化面、スポーツ面、投書欄、意見広告でも可）。

スピーチ用の原稿は、記事の内容を要約し、それについての自

分の意見を加えて八百字程度にまとめる。八百字書けていない生徒が多かったこと、発表時間が長くなることを考えると、六百字の方がよかったかもしれない。普段の作文はなるべく常体で書くよう指導しているが、今回はスピーチ原稿なので、敬体で書くよう指導した。

新聞を忘れてくる生徒が多い。友達に見せてもらう、こちらから新聞を貸し出すなどして対処する。

記事探しを始めると、とたんに賑やかになる。生徒たちは、自分が持ってきた新聞に適当な記事がない場合、友達と新聞を交換するなどして、比較的臨機応変に取り組んでいた。「同じ事件なのに（新聞が違ふと）見出しが違ふ」という声も挙がる。記事の内容について話し合ったり、意味の分からない部分を教え合う光景も見られた。後の感想の中にも、「記事を探す時間が一番楽しかった」という意見が複数あり、口では「大変だ」「（スピーチにしたいような記事が）見つからない」と言いながらも、多数の生徒はそれなりに楽しんでいたようである。ただ、記事を探すことに熱中して、原稿を書き出せない生徒が多い。何度も書き始めるよう催促したが、結局家へ持ち帰った生徒が多かった。家で記事を選んで持ち込む生徒と、何を書くのかすらなかなか決められない生徒との差が開いていく。授業時間内で充分準備が出来るだけの時間は確保したのだが、いざ発表の時間になってもまだ準備が出来ていないという生徒が多数いて困った。

また、まったく関係ないおしゃべりに終始する生徒や、記事の

内容をろくに読みもせずに「(原稿が書けそうな記事が)なんにもない」と放棄してしまう生徒もいた。日ごろ本を読まず、活字を「読む」ことそのものに抵抗感のある生徒は、こうした「読んで、書く」課題に対して最初から敬遠し、反発してしまう。

普段新聞を読んでいないという生徒が圧倒的に多い。投書欄や書評欄の存在を知らなかったり、自分の家で購読している新聞名すら知らないという生徒もいた。そういう生徒にとっては新聞に触れること自体初めての体験であり、記事を選ぶという段階までなかなか進めないのも無理のないところかもしれない。新聞の読み方からまず指導すべきだったか、とも思う。また、記事の用語や背景を調べやすくするために、記事探しの図書館で行うか、現代用語集のようなものを用意するなどの工夫をすればよかったというのも反省点のひとつである。

(3) 新聞に対する「思いこみ」

前述したように、日ごろから新聞を読んでいるという生徒は非常に少ない。その上で今回、記事選びをさせてみて改めて気づいたのは、こちらが思っている以上に新聞に対する生徒たちの「思いこみ」が強いという点である。以下、主な事例を挙げる。

その一 新聞には政治や経済などの(彼女たちが曰く)おもしろくない話題しか載っていない

文化欄、社会面、エッセイなど、新聞には高校生にも読んで充

分理解できる記事が掲載されており、社会にむけて視野を広げるための格好の窓口である。しかも簡単に手に入る。新聞は政治面、経済面の情報を収集するためだけのものではなく、世の中のありとあらゆる話題を仕入れて楽しむものでもあるはずだ。もっと気軽に新聞に接してもいい、ということをおぼろげに学んだのだろうか。家庭の食卓で「今日新聞にこんな記事が載っていたね。」というひとことがあれば、ずいぶん違うような気がする。

その二 (授業の課題だから) 真面目な記事を探さないといいない

記事探しの時間中、「三面記事でもいいんですか」という質問を向けてくる生徒が非常に多かった。何をもって真面目とするのか不明だが、スポーツの話題や殺人事件の記事などは学校の授業の課題として選ぶには不適切だ、という意識が強いらしい。同じようなことで友達に「平和問題とか環境問題だったら聞かなくても書きやすい」というアドバイス(?)をする生徒もいた。

これは生徒たちではなく、むしろ教師の側の問題ではないかという気がする。一見したところ教育的であり、無難な結論を出しやすい題材を選んでくることを評価するような姿勢が私も含めて教師の中にはあるのではないだろうか。私たちが中高生だったころにも、主に成績がよく、要領のいい子の中で、夏休みの読書感想文は「戦争物」を選ぶ、という風潮があった。「結論が決まっていって書きやすい」からである。

国語教育ゼミナールでこの実践について発表させていただいた際、宗教新聞や政党新聞、スポーツ紙を持ち込む生徒についてはどう対応したかというご質問をいただいた。カトリックの学校なので宗教新聞や政党新聞が持ち込まれる可能性はまずないが、スポーツ紙については今回は一応不可とした。これはスポーツ紙の場合、新聞の性質に幅がありすぎるからである。一般紙とそれほど変わらないものから、どう見ても信憑性の薄い記事載せている、いわゆる「ゴシップ紙」まで、十把一絡げで「スポーツ紙」と呼ばれるのが普通だ。比較的信用のおける紙とそうでない紙との線引きが難しいという理由で排除したのだが、こうした指示も固定観念の一因になっているのかもしれない。とはいえ、新聞に載ってさえいけばなし崩しになんでもあり、という指導も無責任だろう。この点に関してはいまだに結論が出せないでいる。

以上、さまざまな「思いこみ」を抱えて、彼女たちの記事探しは出発した。ただ、そうした生徒たちにとっては「自分の力で新聞を読んで理解できる」「読んでおもしろい記事もたくさんある」ということは新鮮な発見だったらしい。「記事を探す時間が楽しかった」という感想は、授業中に気がねなく友達とお喋りができたからという理由だけではなかったようだ。

(4) スピーチ大会(三時間)

教壇に立って原稿を読む。暗記させて、原稿を見ずにスピーチ

させるという方法もあると思うが、新聞記事をもとにしているため難しい用語や数字が頻出する生徒もいること、人前で話すのが苦手なプレッシャーを受けやすい生徒もいるだろうと考え、原稿を見ながらのスタイルにした。

この点については前述の国語教育ゼミナールの中で「やはり暗記させるべきだ。」というご意見をいただいた。また、後日「全員発表ではなく、グループの中で一人代表者を出してスピーチさせる方法もある。」というご指摘もいただいた。原稿を見ながらでは、どうしても「スピーチ」というより「読み上げる」という雰囲気になってしまう。生徒たちもなるべく原稿から目を離して「語る」ようにしなければならない、ということにはわかっていたようだが、緊張もあり、下を向いてしまう子が多かった。後に、その点について自己反省している感想も複数見られた。原稿の字数を短くして暗記させる方法もあるだろうし、この点については今後さらによい方法を模索していきたいと思う。

また、五十分間、他の生徒の発表を聞き続けるだけではだれてしまうので、「相互評価」という形で採点表をつけさせた(資料参照)。これは、国語表現の成績に加味することを通告する。

原稿の読み方についてはあまり細かく指導しなかったが、大きな声で読むことだけは何度も念を押した。原稿作成だけでなく、音読の仕方、上手なスピーチの仕方についてももう少し時間をかけて指導すれば、読む・書く・話す・聞くの四要素を取り入れた授業ができたと思う。今後改良していきたい点である。

高 I 国語表現「新聞記事を読んで」

スピーチ採点表

- ★採点基準
- ・話し方…大きな声ではっきりと話せているか
 - ・文章の構成…自分の意見がきちんとまとめられているか
 - ・内容…説得力のある、おもしろいスピーチになっているか

★10点満点で採点する。めやすは、 10 ……大変よい（クラスに1～2名）
9～7 ……よい
6～4 ……ふつう
3～1 ……もう一歩

高 I S

1		
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19		
20		

21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		

採点者	組	番号
	氏名	

発表が終わると、一人ひとりのスピーチについてこちらから簡単なコメントを加えた。いい・悪いという断定的な言い方をする
と相互採点に影響してしまうのであるべく避け、生徒が取りあげた話題について他の見方もあることを示唆したり、関連のある話題をつけ加えて発展させたりということを心がけた。また、同じ記事についてのスピーチが重なったときには、もともになった記事は同じでも、切り込み方によってスピーチの内容は変わるということを指摘した。

スピーチが終わった時点で、相互採点表のうらに感想（自分のスピーチについて・他の人のスピーチを聴いて）を書き、原稿とともに提出する。

以下、別表は生徒たちが実際に発表したスピーチの題材例である。

○スピーチの題材例

・Y（百合）組

狂言師を客員教授に、日系人クラスについて、

六甲山のゴミ不法投棄、O157感染によるPTSD

オゾン層破壊、ナベツルの減少、ウガンダ紛争、

タイの学生たち、台風5号、休日三連休化、

タイオキシン問題、高齢化社会、雑誌から自分探し、

自治体の可燃ゴミ対策、モンゴルの子供、男性の育児

水難事故、兎毒殺、水害とゴミ、

その後のチェルノブイリ、電車内のマナー、

話し言葉の乱れ、介助犬、奈良の鹿に災難、
珊瑚礁の役割、昨今の学祭、障害児殺害、
盲目の弁護士、パラリンピック、トイレの神様、
英語の勉強法、洗剤混入事件、

インドネシアの森林破壊、大阪に芸術性なし

・K（菊）組

「心を守る会」、ブナ原生林、

製菓会社のボランティア、韓国文化解放、

月ヶ瀬事件判決、薬の講座、水島港沖油汚染、

しし座流星群、話しことば検定、カレー事件、

迷信について、方言について、中国残留孤児、

老人介護セミナー、オゾン層破壊、部落差別、

じゃこ天バーガー、ドメスティックバイオレンス、

テレビドラマからHIV抗体検査、北朝鮮問題、

最近の子ども、大学内でのセクハラ、児童虐待、

折り鶴焼却事件、旅館の女将さん、バソコン普及、

不登校、教師とのトラブル、

輸入動物による生態系破壊、特許、

クロアチアのミスコン、生活指標、

レンジ食品について、全自動は本当に便利か

・S（桜）組

大学入試、動物を通して心を育む、危険な遊具、

盲導犬育成、年齢にこだわる日本人、PHS貸出、

肌色のクレヨン、禁煙のすずめ、ヘルメット着用義務定期テスト廃止、カンボジア地雷、アフリカの言葉、野村氏阪神監督就任、モニターで病院へ、障害者フルマラソン、石器発見、私立の学費滞納増加バブアの自然破壊、もしも淀川が決壊したら、おもちゃドクター、大学の改革、大人の子ども感、食器改良、福祉車両改良、カレー事件の童話

・U（梅）組

その後のオウム、キャベツの不作、修士課程を目指す教師、杉原千畝、鯨について、淀川長治氏死去、地球温暖化、教師の不祥事、ラジオ体操（書評）、サイレンススズカ安楽死、中学生の自殺願望、沖縄県知事選挙、クロール牛、神戸の空港建設反対署名、大学不登校、いじめ、エアバックによる失明事故、カウンセラーの重要性

和歌山のカレー事件をはじめ毒物混入事件一色という時期（十一月）のスピーチだったが、生徒たちはそれほど流されることなく、自分の関心に基づいて記事を選んでいった。カレー事件を題材にする書きにくい、という計算もあっただろう。しかし、多くの生徒たちは「自分にとって大切な記事は何か、自分がクラスの人みんなに伝えたいことは何か」ということを、こちらの想像以上に真剣に考えて記事を選んでいったように思える。

一方、「生徒たちの実感でとらえられるような題材が選べてい

ない。」とのご指摘もいただいた。確かに前述した「思いこみ」がここにも反映されている点は否定できない。しかし、日ごろ自分とは直接関わりのないこととして社会の出来事に背を向けがちな生徒たちが、新聞記事という媒介を通じて、世の中のことについて知り、考え、自分の意見をまとめたということはそれなりに意義のあることではないだろうか。

世間でおこることの大半は「他人事」である。しかし、その「他人事」がいつか回り廻って自分のところへやってくる、それが現代社会のありようだということを生徒たちに気づいてほしい。それがこうした課題に取り組むときに、私がいつも感じていることである。生徒たちはそれぞれ、自分の興味、関心、理解力の範疇に引っかけた「他人事」を選んできた。実感という点で多少欠けるところがあったとしても、日ごろ背を向けていた社会のニュースに一応立ち向かってみた、そのことを今は評価してやりたいと思う。

三、実践を終えて

（１）発表風景

まず、クラスの雰囲気が大きく影響することを痛感した。スピーチの後、自然に拍手がおこるようなクラスでは、発表する生徒の声も大きく、聞く側の態度も非常によかった。全体的に盛り上がりのある、楽しい雰囲気でのスピーチとなっていた。

ひたすらはじめにおとなしく聞いているクラスや、全体的にざわわしていたり、居眠りの目立つクラスでは発表者の声も小さくなりがちになる。話すだけではなく、他の人の発表を聴くことも大切な勉強よ、と強調したが、雰囲気を変えていくのは難しい。

これは、発表時間が三時間（三コマ）と長くなりすぎたせいもあったと思う。週一の授業だから三週間に渡ってスピーチ大会をしていたわけである。四十余名全員に発表させ、教師側から一人ひとりに対してコメントするとどうしてもこれだけの時間がかかるのだが、やはりだれてしまうことは否めない。

それでも何とか無事終了できたのは、全体的に発表者の声が大きく聞きやすかったのと、さまざまな話題が飛び出してくることに興味を持った生徒が多かったからだと思う。その点では活発で人なつっこく、物怖じすることの少ない生徒たちに非常に助けられたと思うし、感謝している。反面、前章でも触れたように話し方の指導をもっといねいにしていれば、原稿棒読みも少なくなり、さらによいスピーチになったのではないかと思う。

（2）発表内容

記事の要約に四苦八苦している生徒が多かった。どうしても新聞記事の引き写しになり、発表者自身意味がわかっているのだから、と首を傾げたくなるような難解な用語が出てきたり、漢語が多くて聞いているだけでは意味をつかみにくいスピーチもあった。その一方で、新聞記事を完全に把握して自分の言葉に直し、

実にわかりやすくまとめてスピーチをしている生徒もいた。「新聞記事そのままではなく、自分の言葉で語ってくれているので内容がよくわかるね。書いて伝わりやすい言葉と話すときに伝わりやすい言葉は違うね」とコメントすると、納得していた生徒が多かったようで、実例の力を感じた。

もっと暗いニュースが多くなるかと思っていたのだが、楽しい話題も飛び出してきたのはうれしい誤算であった。彼女たちの「思いこみ」を打破すべく、「楽しいニュース」「おもしろい話題」を評価してコメントしたのが効いたのかもしれない。人の発表を聞いてから自分のテーマを考えよう、という少々ずるい生徒もいたようだから。

（3）新聞記事スピーチの利点と今後の課題

最初からそのつもりでもくろんでいたこと、実際にやってみて気がついたことなどさまざまだが、私が考える新聞記事スピーチの利点をいくつか挙げたい。

①自分の意見を発表する機会を与える。

自分の考えていることをみんなに聞いてほしい、他の子の考えていることを知りたい、という欲求は生徒たちの中に潜在的にあるようだ。「深刻な話、真面目な話はしない」という友達関係のなかで、本当は話し合ってみたくてもどう切り出せばいいのかわからない子もいるのかもしれない。

② 新聞に触れさせる。

「新聞っておもしろいと思いました」と感想を書いた生徒の中の何人がこれからも自主的に新聞を読み続けるか疑問だが、それでも「その気になれば私でも読める」という実感が得られたのは大きいと思う。少なくとも「思いこみ」だけは打破できたのではないだろうか。

③ 社会の出来事を知らせる。

新聞記事を読みながら、あるいは原稿を書きながら、珍問奇問が続出した。できる範囲で答えながら、本当にニュースを知らないんだなあとため息をつく。

ただ、この点については非常に不安を持っている。それは、新聞を読んで文章を書くという授業実践は、ともすれば「レベルの低い社会科」になってしまうのではないか、ということである。国語表現の目的はニュース解説ではない。しかし、題材を新聞から取る以上、そうした解説的な作業もせざるを得ない。社会科と国語科の教師が協力してチーム・ティーチング方式で行うのが、本来、こうした授業では理想的なのではないかと思うが、個々の学校・教師によって事情も異なるだろうし、何ともいえない。今話題の「総合的な学習」とも関わる問題だろう。

④ 多方面からの評価ができる。

新聞記事スピーチは、総合的な作業である。新聞記事を「探す」、文章を「書く」、そして原稿を「話す」。作業が多岐に

渡るため、いろいろな角度からの評価が可能である。平たくいえば、ほめやすいのである。

書くことは苦手だが、人前で話すのは大好きで、大きな声ではきはぎと発表できる生徒もいる。書くのも話すのももうひとつだが、個性的なセンスでだれも気にとめなかったようなユニークな記事を探してくる生徒もいる。意見は平凡だが、探してきた記事を実にわかりやすく上手に要約してスピーチする生徒もいる。「書く」作業だけでは評価できなかった生徒を他の角度から評価できるというのは、じつは実際にやってみるまで私自身も気がつかなかった大きな利点であった。

⑤ 生徒が自分の理解力のレベルに合わせて記事を選べる。

これは実は、全員がそうだとはいえない面がある。新聞記事を読んで理解するというレベルにそもそも到達していない生徒も少数だが存在するからである。それでも、一冊の教科書を四十人でいっせいに読むよりは、選択余地があるだろう。

以上四点を挙げたが、この実践が何の問題もなくうまくいったというわけでは決していない。むしろ、これから改良していかなければならない点、問題点の方が多い。原稿を完成させるまでにかかる生徒個々の時間差をどうするのか、原稿を暗記させるか読み上げさせるか、全員発表か代表者発表か、授業の時間配分をどうすべきか。そして何より、やる気のない生徒にどう取り組ませる

か、教師がどの程度助言すべきなのか。

また、国語表現全体の問題として、「正しい日本語を駆使する能力」の向上を重視すべきなのか、「のびのびと自己を表現する能力」を育てることを目標とすべきなのか、いまだに結論が出せないでいる。

この二つが表現において共に大切な能力であることはいうまでもないが、限られた時間の中で、その双方を満たすことは難しい。今年度に関していえば、私は後者を重視した国語表現の授業を行ったが、受験を控えた三年生の授業ではそうはいかない。進学指導を重視する私立高校の現状の中で、入試対策を無視した授業をすることはやはりできないだろう。自分の力量不足もさることながら、国語表現という教科の定義づけの曖昧さをひしひしと感じている。

(4) 生徒たちの感想

- ・発表はみんなの話も聞いて楽ししいし、自分もやって楽しいので、何度も、またやりたいです。
- ・みんなちゃんと私の話を聞いてくれたのですごくよかったです。
- ・人のスピーチを聞いているとき、やっぱり声が大きいうただけで聞こえという気になりました。伝える姿勢も大切なんだなと思います。
- ・スピーチをして、私はとても恥ずかしかったです。漢字や、自

分で書いた文字が読めなかったりして、私は自分が言い終わってから、読む練習をしとけばよかったと思いました。それにみんなのスピーチを聞いて、地球の環境のことや、人々に役立つための記事を読んでいてみんなすごいな、そんなことを思っているのかと思いました。

・私はみんなのを聞いてやっ自分のができあがったのに、みんなは文を作るのがうまくて感心した。

・全体的にみんなよく書けていて、聞きやすかったと思う。今まで知らなかったたくさんを知ることができたと同時に、新聞ってこんな楽しいことも書いてあるということもわかった。

・まだ、政治のページはよくわからないけど、面白い記事はたくさんあるんだなと思いました。同じ記事について書く人が多くなるんじゃないかなと思ってたけど、けっこうみんなバラバラでよかったし、人それぞれ、いろいろと考えているんだなと思いました。

・スピーチをするのはひさしぶりのことでなんだか大変だった気がする。人前に出て意見を言うのは事前に用意しておかなければいけないし、発表するかぎりはきちんとしたものでなければいけないと思うからだ。準備も大変だったけど、がんばることができてよかった。

・新聞という身近な情報から記事を選んで作文を書くのはやりやすいです。私は新聞をよく読むので、これを機にテレビ欄しか

見ない人も社会面とか読んでみてほしいです。

・(選んだ) 新聞記事がけっこう小さかったため、内容を、どのように展開していけばいいかとすごい悩んだ。今までテレビ欄しか読まなかったけれど、けっこう面白い記事が載っているもので、少しずつ読んでいこうかなという気になりました。

・はじめ、新聞の記事を選んでスピーチをするって聞いたときは、私は、文章を書くのが 苦手だからぜったいにできないと思っていたけど、記事を選んで、読んでいる間に、いろいろ自分の意見が出てきて、苦労はしませんでした。

・私は迷信について話したけど、私はみんなは新聞記事だからすぐかたい話をするのかなと思って最初はこの話にしようと思ったとき、迷ったけど、みんなそれぞれ楽しい話でスピーチを聞いていて楽しかったです。人の前で話す難しさや、記事の内容と自分の意見をまとめることの難しさがわかりました。

・多くの人が新聞の中でも目立たないような小さな記事を使って個性的なスピーチをしていました。聞く側として新聞の見出しになるような記事からのスピーチばかりだとおもしろくないので、自分が知らないことを発表しているのを聞くと興味があつて、なかなか楽しかったです。新聞をみながら原稿を書くとうしても難しい単語をそのまま使ってしまったって、聞く人は意味が分からないといったことが多く、これからはそういうこともちゃんと考えて機会があればまたスピーチをしたいです。

・新聞から記事を選んで書くというのはすごく難しかったです。

新聞を読んでも特に書きたい記事なんてなかったし、どれも言葉が難しく、探すのも嫌になりました。

・自分のスピーチはエイズ関係の話をしたのだが、ドラマを見ていない人に尋ねてみると「よくわからなかった。前半のほう。後半は共感できてんだけど。」といわれ、反省。もっと気遣って文を書けばよかったと思った。

・意見文を書くのは初めてで、それをスピーチするなんて難しいと思ったけど、やってみたらけっこう面白かった。でも恥ずかしかった。

・本当に緊張した。でもいい経験だと思った。公立ではこんなカリキュラムはないので、初めてのスピーチだったから。やっぱり、人の意見を聞くのも自分の意見を言うのも大切だと思いました。

・スピーチは一人ひとり、思ったことや感じたことが言えるからいいなあと思った。

・私は将来、コンピューター関係の仕事につきたいと思っているので、どうしてもこういう記事にはかり目がいつてしまします。いつもあまり見なかった新聞ですが、このスピーチの記事を選ぶところから、新聞を読むことが多くなりました。地域のページなど、自分のわかる範囲のことが書いてあると、とてもうれしくなるし、読んで楽しいです。スピーチは前まですごくいやだったけど、今回やってみて、少しはおもしろく感じたし、また機会があればやってみたいな、と思います。

・新聞記事の中で政治や経済についてのスピーチは予想していたとおりあまり聞きませんでした。私もそのような記事には一切ふれませんでした。それは興味がなからです。でも現代社会を知るためには読む必要があると感じました。

・自分の意見を人前でいったり、聞いたりするのはこれから大切だと思えます。アメリカみたいにもっとしてほしいと思えました。本当をいうと、私もけっこう苦手だけど、順番交代で「こんなことがあった、こんなことをした」というのを授業でしたら、苦手が克服できそうだと思います。

・こういうスピーチは何度もしたことがあったけど、特に今回の意見文は自分でまず記事を選びそれについて考えなければいけなかったので最初の一時間は記事探して終わってしまいました。

・新聞を読むのもいいけど、その記事を作る記者にも興味をもった。

・話すとき緊張したけど、友達に声が大きかったといわれてうれしかった。

・みんなそれぞれ個性があつておもしろかったです。いつも「このことについて書いてみよう」といっていき書いてみたものの、自分のことしかわからないので、他の人はどう考えているのだろうと悩んでいたからです。だから今回のスピーチは私にとつてとてもうれしいものでした。

・スピーチは一番何を伝えたいか、そして、相手にわかりやすく

伝えるといったことが大事だと思います。私のスピーチはただあったことをつなげてるだけで、自分の気持ちもあまり取り入れていませんでした。だから相手には出来事だけしか伝わりにくいと感じました。

・私もみんなに理解してもらえばいいと思つてがんばって書こうと思えたし、新聞を開いて中身を読むことに対して、親近感というか、習慣のようになり、苦ではなくなりました。

付記 この原稿は一九九八年十二月二十一日、「国語教育ゼミナール」で発表させていただいた内容をもとにしています。当日ご助

言いただきました先生方にこの場を借りて御礼申し上げます。

(みの・ちづる 聖母女学院中学高等学校非常勤講師)